

人間国宝

東京北区観光協会

野村四郎 × 大前孝太郎

飛鳥山薪能スペシャル対談

今年初めて飛鳥山薪能に出演することとなった日本能楽会会长であり人間国宝でもある野村四郎氏と、開催地である北区に昨年誕生した東京北区観光協会の会長であり、城北信用金庫の理事長でもある大前孝太郎氏の対談をお送りする。



左：大前孝太郎

右：野村四郎

司会：旅川雅治

旅川
野村四郎先生にお伺いいたしますが、薪能について、何か思いがございましたら、お話をお願ひします。
野村

まず、薪能というのは、この自然の空気と、添いながらやる。これが、やっぱり芸の原点ですよ。元来、屋外でやつていたものが、屋内に入つて、空気が変わつてきました。それ従つて、能の演じ方も、段々変わつたように思います。そして、野外でやるつて、本来は、「芝居見に行こうよ」って言うんじゃなくて、「芝居に行こうよ」という言葉だつたらしいんです。当時は、野外で、例えば神社で祭礼がある。また農閑期だと、みんな近隣の人たちが、「おい、芝居に行こうよ」っていうのは、神社のその芝居に座りに行つて、そして能を見て、お神樂を見て。そして一献飲みながら、一つの心のゆとりを持つ。これが祭りなんじゃないかなと思います。「芝居見る」っていうのも、やっぱり自然という。自然の空気つてものですね。それから、能のありようっていうのは、元々たくさんあつたはずなのです。屋外から屋内に入りましてから、固まっちゃつたようです。自然と芸というのは、切つても切れないものです。太陽が、朝日が上がつてまいります。それから西に沈みます。私の考え方ですから、学術宗教的でも何でもないのですが、「東から太陽が上がるのは、神の心や」と。西へ、午後になつて「西に太陽が沈むのは、仏の心だ」というふうに、簡単に一日を考えたらと思います。ですから、神の心のときのですね、午前中は、晴れ晴れとしている訳です。そうするとね、高音はダメです。低音でやります。心の

調べ。西に太陽が沈む時刻になりますと、高音になる。これが、光陰、光と陰。要するにそれが二つになるのが一つになつてゐる考え方。これが日本人の考え方であると、常々思つてます。それを、もじつて言いますと、相対性理論。AINシユタインつていふことになりますね。相反するもの。そこで、人間がやるのですから、人間が動くつていうのは核ですけど。要するに、東と西の中心にある、核です。こいつうふうに、実は考える。これまで物理学会でね、「何かしやべれ」って言われてね、途端に考えてね、創った言葉なんで(笑)

にわかなのですけれども。私が何か相対性理論といふものの、相対するものつていうのは、日本人の元々の根幹にあつたのだというふうに。例えば「東西」を、一つのものとして考へるでしょう。「天地」、「善惡」、相反するものを一つのものとして言葉で考へていく。人々そういう感性つて言つて、文化を日本人は持つてゐると思います。

旅川
はい、ありがとうございます。飛鳥山新能を開催しています北区に、観光協会が去年出来上がりましてから一年になります。これまでの活動をちょっと、大前会長に伺いたいと思います。

当協会は、23区の中でもかなり遅くにつくられた観光協会でございまして、これまで観光協会のプランはあつたのですが、なかなか実現と言つて、実際に設立をすることができました。まだ、一年半の活動なので、あんまり大したことができないないので

すけれども。基本的な考え方は、それこそ飛鳥山の薪能にとても刺激を受けているところがございまして。やはり、北区内にある空間に、どれぐらい面白い、ときにはエッジの効いたとか、そういうコンテンツを彩れるかというようなことが観光としては重要なだらうなというふうに思つております。飛鳥山も、「徳川將軍八代將軍吉宗ゆかりの、桜がきれいな公園ですよ」と、まあこういうふうに説明がされます。それで人々が、良いと思うかと言うと、やっぱりもうちよつと感覚的なところが大事でござります。そこで薪能を通じて、幻想的な空間で、その時間を体験できるとか、それをどれぐらい積み上げておけるのかが、やっぱり観光という立場としても大変なことだなどというように考へている、昨日でございます。

王子に「北とぴあ」という区の所有のビルがあるのですが、ここ5階に空中庭園という施設がございまして。かなり広い場所なのですが、今までそこは、花壇があるだけで何にも使われていないスペースだつたのです。そこがもつたいないじやないかといふことで、先日、そこを会場にしてピアガーデンを開催しました。5日間で1500名を超える方にお越し頂きました。お客様の笑顔を、そういう場所で見られるつていうのは非常に素晴らしいなと思いました。こうすることを二つやることが観光なのではないのかなど考へる次第でございます。

旅川
そういうものを積み上げて行って、もっと発展させていきたいということですね。

そうです。凄くだから、インスピアイアをされるわけですね。

旅川

2020年のオリンピックの開閉式のチーフディレクターに、先生の甥にあたる萬斎さんが就任されました。能楽の方がこのような企画を立てることになつたのは素晴らしいことですね。

野村

そうですね、ええ。萬斎からは報告を受けました。彼も私が会長をやつております、日本能楽会の理事の仕事をいただいております。日本能楽会も、オリンピックとは、これ国仕事ですから、無関係どころではありません。率先して、いろいろ加わつていただきたいと。オリンピックつていうのはギリシャで発祥した。そのギリシャで発祥したのは、元々スポーツの祭典であるとみんな認識してられるけれども。私の知る限りでは、ギリシャでは、スポーツと詩、もう一つは音楽で始まつたのが、この祭典だつたと、言われています。
ですから、芸術の祭典でもあつたわけですよね。それが、いつの間にかスポーツだけになつて、大いに芸術の、ちょうど開会式とフィナーレだけが芸術じゃなくともね、大いにお客様、外国の賓客を、日本本の伝統芸能などを、ご覧いただく。そういう非常に大事な、人と人の心の通い合つていうものが、やはり、生きとし生けるものの根本だと思いますよね。そういう意味で、オリンピックは非常に大事な催しと理解してます。

大前

旅川

大前会長が理事長を務める城北信用金庫さんの方も、アスリートの方を雇用されているということで、近々オリンピックということもありますので、そのことについてお考えを伺えますか。

大前

私もスポーツと芸術、あるいは芸能つていうのは、2本柱なんだと思うんですね。人間の肉体と精神と言いますかね。非常に両方大切な、国を上げてやっぱり伸ばしていかなきやいけない。それは産業的、ビジネス的にも非常に重要なことだと思っています。いろんな意味で重要な活動だとまず思っておりまます、よく私、「スポーツの万能性」つていう話をさせていただくのですが。やっぱりスポーツつていうのは、社会的にも教育的にも、そしてビジネスとしても、すごく大きなボテンシャルを持つております。いろんな形でそれを育んでいくというのは、一つの国の非常に重要なパワーになるのではないかなど思っております。そういう中で、芸術であれば演者さん、スポーツであればプレイヤー、これがまでは、数多く、裾野が広い形で活躍できるような環境がなければ、やっぱり全体としてのレベルも上がっていくません。そういう意味で、大学を卒業してもオリンピックを目指したいという子たちを、何名か採用しています。練習環境を与え、オリンピックに出場することですね、そういうことを後押すことを、私たちの活動として行っています。今年の2月に平昌で、冬のオリンピックがございました。私たちの職員でスキーの選手が一人日本代表選手になりました。今アスリートは全部で6人いるん

ですけども、他5人もそれにまた刺激を受けて、2020年の東京オリンピックを見据えて、頑張つてるというところです。

もう一つちょっと申し上げれば、オリンピックといふのは、一般的にはスポーツの祭典のようで、野村先生のご指摘のように芸術競技というのがありました。だからオリンピックの理念には、やっぱり肉体と精神という両方があって。肉体を表現するのがスポーツであり、精神を表現するのが芸術であると、こういう考え方です。双方、人間の可能性を競うものであるっていう、こういう立て付けだったわけです。それがまさに、萬斎先生がやられる、ああいう芸術展示という形で、残つて受け継がれてるわけでございます。やっぱりそこに、伝統芸能の代表的な、能楽というものの関係の方がしっかりとそれをつくれるっていうことは、非常に象徴的でございます。やっぱりそれをきっかけに、こういった芸術芸能ということの枠組み、国を上げての枠組みついでございます。やつぱりそこには、能樂というものが、もつともっと広がるつていうことを、私は大いに期待をして見てています。

旅川

先生は精進を重ねて、確固たる地位を築いてこられました。若い方が学んでいくうえで、大切なことは何か、お話しいただけますか。

野村

「能を分かりやすくすればいいか」とか、「能は退屈なものだ」と思う人が多いつて聞いております。私は、「能は分かろうと思わなくていい」つて、いつも言っています。「感じろ」つて。「じゃあ、我々が絵を見るだろう?」ピカソの絵を見て、あれ分かるかい?あれから、この不思議な世界から何か感じ取る。それが芸術じゃないか。分かるつていう必要はない」と言つております。そして、分かるのは、後で分かればいいとね。昔から、「感動した能は三日忘れない」つて言つてます。三日間その能が頭の中に残つてる、この体に感動が残つてるつていう三日つていう言葉を使って、昔の人は言つてました。

ええ。まあ、我々の世界も、何て言うか、技も。相撲の言葉で言う、「心技体」つて言うでしょう。あれ、もう我々にも通じるんです。全て心技体なんですね。スポーツだって心技体ですね。

おっしゃる通りですね。

大前

そうですね、先生のね、能の、能樂の精神をやっぱ広げてもらいたいですね。

野村

結局は、能も役者が舞つてたりなんかするのは、確





かに大事ですけど。要するに、地謡とかね、目に見えない裏側にいる人たちが、本当に能を支えてない。結局、質の良いものはできあがりませんねえ、はい。本当に、私が尊敬申し上げておりまして言ふんです。「なんとか何年、なんとか何年」とた観世寿夫っていう人は、やはり、「もう僕はシテ構えなくなつたら地謡だけでいいんだ」っていう説を唱えてましたね。「地謡で命をかけるんだ」って。そのくらいに、能というものの、能演劇っていうのは、地謡であれ囃子っていうのは、非常に重要な位置にある。舞つてる人も大事なんですけれども。ある方なんか、「地謡が回してやるよ」って、これは、宝生流のえらい人が。「お前は、ただ動いてりやあいい。回してやる」って。そういう大先輩がいらして。「はい、分かりました」って言って。まあ、昔の方はね、そりやあ、もう、全てができるんだ。「謡いが謡えますね、例えようをなさいますよね。「橋掛かりが歩ければ、その能は成功だ」とかね、「橋掛かりを歩けりやあ、もう、全てができるんだ」。

「謡いが謡えますね、例えようをなさいますよね。「橋掛かりが歩けば、その能は成功だ」とかね、「橋掛かりを歩けりやあ、もう、全てができるんだ」。

「謡いが謡えますね、例えようをなさいますよね。「橋掛かりが歩けば、その能は成功だ」とかね、「橋掛かりを歩けりやあ、もう、全てができるんだ」。

れば、型はできるよ」とかね、こういうようなね(笑)。「型ばかりやるな」っていう。だから、「謡一生」って言ふんです。「なんとか何年、なんとか何年」とて言ふんです。ですから、謡がもう命だと。我々も、本当に、宝生流の先輩から、そういうふうな言葉を。たまたま狂言をやつてましたんで。私が観世流でありますても、いろんなことを他流の方が教えてくださいましたのは、元狂言師であつたから(笑)。お陰だつたと思いますね、

域に持ち帰つて、その地域なりの新しいお酒の文化っていうのが生まれていったようようです。そういう非常にアバンギャルドな、先進的な施設だったのですけれども。それが、今機能を失つていて、箱だけ、重要文化財的に残つてしまつています。これはね、非常に薪能なんかにも刺激を受けるんですけども、もつたいないですね。

こういった施設を、施設自体はきちんとあります。コンテンツが今ないということですから、まずはイベントからかもしれません、少しいろんな発信のできるような、そして皆さん来て楽しんでいただけるような、コンテンツ作りができるだらうかと、チャレンジを行おうとしているところです。そういうことを含めて、これからも薪能をとても楽しみに、ますます発展していただきたいなと思っております。

旅川

飛鳥山薪能は第十六回を、迎えますが、北区の観光にとって、どのような存在で、どのような意義があるのか、お考えがございましたら、是非。

大前

やつぱり改めて、飛鳥山の薪能に、いろんなことがインスピライアされてるという印象があります。やっぱり同じ飛鳥山、そこに伝統と歴史と、それからエンターテイメント性と。そういうものが組み込まれた空間が出現することによって、やつぱり同じ景色も輝いて見えます。そういうことが、地域・観光という役割に当ても、とても大事だろうと思います。そういう意味で本当に、薪能の更なる発展を期して頂きたいと思っております。それ以外の活動でも、例えば飛鳥山の近くに、醸造試験場という、昔は日本のお酒文化の発祥地だった国所有の施設があります。実はその昔この場所で、「これから流れる日本酒はこういうものだ」とかを、全国からそのお酒の関係の人たちが集まつてきて、それを地

野村 四郎
1936年和泉流狂言方六世野村万蔵家に出生。55年初シテ「俊成忠度」62独立、これより観世流シテ方として活躍。東京藝術大学名誉教授、(社)日本能楽会会長、16年重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。18年旭日小綬章受賞。

大前 孝太郎
1987年現三井住友銀行入行。98年内閣官房特別調査員、2001年内閣府参事官補佐、09年城北信用金庫常務理事を経て、15年6月に理事長に就任。2017年1月に東京北区観光協会を設立し会長に就任。

旅川 雅治
1990年小坂部恵次に舞台制作を師事。96年能楽プロデューサー・舞台監督として独立。これより舞台制作・薪能・海外公演など手広く手掛ける。17年~新・観世能楽堂の音響・照明を担当。